

超高齢社会と地域共生

仙台敬老奉仕会

吉永 馨

世界の高齢化率

1位 日本：	28.5%
2位 イタリア：	24.0%
3位 ドイツ：	22.7%
4位 フランス：	20.8%
5位 スウェーデン	20.7%
38位 アメリカ：	16.2%
64位 中国：	11.5%

世界一の長寿国

長寿金メダルだが・・・？

1. 孤独死、自殺、心中、依頼殺人、虐待
2. 施設は人手不足、3k（きつい、汚い、危険）離職率高い。介護は最低限の身体介護しかできない。年寄りには寂しい。
3. 25年問題が差し迫っている。状況はもっと厳しくなる。
4. どうすれば世界一の長寿を喜び楽しめるか。

国の対策

1. 外国人の導入、ロボットの活用、離職者の呼び戻し、ボランティアの育成。
しかし実効が上がっていない。
2. 地域包括ケア：2005年（医療と介護の調整）
3. **地域共生社会** 我がこと、丸ごと 2017年、地域
の人が助け合う社会。
4. かけ声は高いが、現場の状況はあまり改善していない。
5. なぜか？ どうすれば良いのか？

アメリカでの経験

1. アメリカで国際学会があった際、介護施設を見学する機会があった。
2. ボランティアと職員とファーストネームで呼び合い、仕事仲間となっていた。これは日本にも取り入れたいと思った。
3. 大学を定年後、ある病院に勤め、そこでボラの育成を進めた。
4. そのうち、ボランティアがもっと必要なのは介護施設だと気がついた。そこで仙台敬老奉仕会という組織を作り、介護ボランティアの育成に努めた。

育成の試みは難航した

1. 日本にはボランティアといえは慰問団の訪問であり、無資格の市民が年寄りに寄り添うことは許されなかった。
2. アメリカでは寄り添いが基本である。日本で介護施設も、福祉関係の当局も知らない。そういう伝統も経験もない。
3. 研修会は隔月に開いたが、3年間は無駄骨だった。
4. 3年目から寄り添いを認めるところが出て来た。その後細々と寄り添いを続けている。



理解者が現れた 1

1. 宮城県の老人福祉協議会の十数人に対して私が講演をする機会があった。
2. その時、一人の施設長が寄り添いを理解し、職員を派遣して当会の寄り添いの実態を学ばせ、その職員を中心に市民からボランティアを募り、実習を経て寄り添いを実践させている。
3. この施設長は、常々、施設内のお年寄りが寂しがり、それに対応する道を探っていた。

理解者が現れた 2

1. ある病院から当会に相談があった。療養病棟の患者の生き甲斐に関して対応したいと。
2. その病院を訪問して、職員に対して欧米型の寄り添いボランティア制度を紹介し、お勧めした。
3. すぐその理念を理解され、準備を進めた。福祉担当者がカナダの病院を訪ねて実情を視察し調査してきた。
4. 未だに市民の応募者が少ないが、既に何人かが寄り添いボランティアを実践している。

理解者が現れた 3

1. 宮城県内のある市長さんにアピールする機会があった。
2. その市長はすぐ理解し、直ちに準備を始め、予算も付け、市民の呼びかけてコーディネーターとボランティアを募集し、訓練して実践に入っている。
3. この市長は、かねがね介護施設の人手不足を認識し、入所者の介護を充実させる方法を模索していた。

心のケア

1. 以上の3事例はいずれも以前から年寄りの心のケアが満たされていないことに気づき、その解消を模索していた。
2. ヒトは体のケアだけでは満足できない。心のケアこそ寄り添いボランティア使命である。
3. 心のケアが必要不可欠という意識を持つヒトが少ない。施設の施設長も、役所の福祉担当者も、社会福祉協議会も、マスコミも。

欧米ではボランティアが・・・

1. 欧米では市民が積極的のボランティアをして介護を支えている。
2. アメリカやカナダでは、介護施設には必ず多くのボランティアが年寄りの心のケアを支え、職員は体のケアを行ない、心身両面のケアが整っている。
3. 在宅の老人も、給食サービスなど、ボランティアが奉仕している。施設に対する寄付も多い。
4. まさに地域共生体制ができている。
5. なぜ日本ではこの体制がかけ声倒れになっているのか。

欧米の市民意識

1. 市民生活は市民が支えるという伝統。
王の苛政して市民生活を守った歴史。市民革命が何度も起こった。
2. キリスト教の愛の教え。
3. 人権思想：この世で最大の不幸は、戦争や貧困などではありません。人から見放され、『自分は誰からも必要とされていない』と感じる事なのです（マザーテレサ）
4. 奉仕は楽しみ。無償の愛は無上の喜び。金銭によらない大きな報酬。

欧米との交流

1. 2012年2月 仙台の姉妹都市リバーサイドとロサンゼルスを訪問、施設を見学、調査した。
2. 同年10月、両都市から専門家を仙台に招待し、介護フォーラムを開催。
3. 2016年10月 カナダのオタワからボランティア育成の3人を仙台に招待、第2回介護フォーラムを開催。
4. 2018年9月 オタワ訪問、研修を受ける。

ブリュエール病院の3人





1. カナダ人の44%（1270万人）がボランティアをしている。
2. 年間のボランティアの総時間は20億時間。
3. 若い人（15-19歳）は最もボランティアしやすい
4. 年齢が進むと共にボランティアは減るが、年配者（55歳以上）もボランティアに励み、総時間の39%を彼らが担っている。

5. すべての長期ケア施設は、ボランティア受け入れプログラムを制定しなければならない。

6. それによってボランティアを励まし、ボランティアが入所者に関わる活動を支えるのである。



マザーテレサの思い

1. インドのカルカッタで貧しい人のために奉仕した。特に路傍の行き倒れ、瀕死の人を収容して看取った。
2. 彼らはお礼を言う力もない。しかし目に感謝の思いを現わして世を去った。
3. テレサの思い：「この世で最大の不幸は、戦争や貧困などではありません。人から見放され、『自分は誰からも必要とされていない』と感じる事なのです」

欧米の介護ボランティア の標語

1. この世で最大の不幸は、戦争や貧困などではありません。人から見放され、『自分は誰からも必要とされていない』と感じる事なのです（マザーテレサ）
2. 受けるよりは与える方が幸いである（聖書）
3. 人は得るもので生計を立て、与えるもので人生を築く（チャーチル）

We make a living by what we get, but we make a life by what we give.

市民のためにも必要

1. ボランティアは生き甲斐、やり甲斐を感じ、視野が広がり、人生が豊かになる。これは金銭を超えた報酬である。
2. そのため、欧米のボランティアは始めると辞めない。
3. この喜びの場を市民に開放しなければならない。現状は閉鎖されている。
4. これぞ本当の地域共生社会である。

パラダイムシフト

1. パラダイムシフト (paradigm shift) :
時代や分野において当然のことと考えられていた認識や思想、社会全体の価値観などが革命的にもしくは劇的に変化すること
2. 日本の高齢化の現象は史上初めて出現した。従来の考えでは追い付かなくなった。新しい欧米型のボランティアが絶対に必要になった。そのようにシフトしよう。